

本紙は、秋季大会終了まで大切に保管してください。

中古文学会 2020 年度秋季大会 開催案内

会員の皆様へ

2020 年度秋季大会は北海道大学での通常開催を目指して準備を進めてまいりましたが、現下の情勢を考慮し常任委員会において検討を行った結果、本学会初となるオンライン方式による開催形態をとることとなりました。困難な状況下にあっても研究の火を灯し続けること、そのための機会を絶やさないことが、学会の使命であるとの認識によります。会員の皆様のご理解と一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2020 年 9 月 17 日 中古文学会事務局

開催日	2020 年 10 月 17 日(土) 18 日(日) オンライン開催
プログラム *詳細は裏面参照	シンポジウム 〈リアルタイム中継型〉 研究発表会 〈オンデマンド配信型〉 第 13 回中古文学会賞受賞者発表／総会／委員会
秋季大会 特設ページ *会員専用	URL https://2020au.chukobungakukai.org/ ログイン ID パスワード

注意事項

- ① 本大会の参加資格は【学会員のみ】です。
- ② 大会特設ページのログイン ID・パスワードの取り扱いにはご注意ください。紛失等による問い合わせには応じかねます。また、ID・パスワードの再発行もいたしません。
- ③ 本大会の参加事前申し込み、および参加費は【不要】です。
- ④ 大会特設ページは、中古文学会公式サイト <https://chukobungakukai.org/> トップページからもアクセスできます。

問い合わせ先 *できるかぎりメールをご利用ください。

中古文学会事務局 〒480-1197 愛知県長久手市片平 2-9 愛知淑徳大学文学部久保朝孝研究室内
TEL : 0561-62-4111 (代表) E-mail : info@chukobungakukai.org

(裏面あり)

大会プログラム

*〔教〕専任教員、〔研〕研究員、〔院〕大学院学生

<p>〈大会企画〉シンポジウム「これからの古典教育を考える」 趣意説明・司会 奈良教育大学〔教〕 有馬 義貴 基調報告1「古典教育という営為—国語科教員の立場から—」 奈良女子大学附属中等教育学校〔教〕 井浪 真吾 基調報告2「うたを重ねる—和歌短歌・和漢比較教材とメディア文化—」 宮崎大学〔教〕 中村 佳文 基調報告3「古典の魅力を発見させること—研究は教育に活かせるか—」 和洋女子大学〔教〕 吉井美弥子 パネリスト討議・質疑応答</p>	<p>リアルタイム 中継型 10月17日(土) 午後</p>
<p>研究発表会（以下の配列は秋季大会申込受付順。○印は2020年度春季大会発表予定者。） 『源氏物語』若紫巻異見—「及びなう思しもかけぬ筋」をめぐって— 国文学研究資料館〔教〕 岡田 貴憲 教科書の中の「藤原道長」 —「望月」の表象と〈戦前〉の歴史教育、国語教育をめぐって— ○鹿島文庫〔研〕 坪 美奈子 清水浜臣書入れ本『枕草子春曙抄』「山は」段の考察 —加藤磐斎『清少納言枕草紙抄』との関係を起点として— ○東北大学〔院〕 渡邊 美希 『在明の別』の人物と構造—作中和歌の検討から— 九州大学〔教〕 辛島 正雄 『源氏物語』匂宮の薫物と〈園芸残渣〉について—香りを創る人としての再考— 佐賀大学〔研〕 田中 圭子 『土左日記』における日次記の効用—漢文日記との比較から— 北海道大学〔院〕 大場 健太 狭衣物語・深川本系本文享受の—様相— —為明本における「九重の」歌およびその周辺本文を例として— 大阪大学〔院〕 小林 理正 『うつほ物語』の琴の名称と漢籍との関係について ○國學院大學〔院〕 本間 悠子 「餞」歌考 ○皇學館大学〔教〕 吉井 祥</p> <p>第13回中古文学会賞受賞者発表 総会</p>	<p>オンデマンド 配信型 10月17日(土) 10月18日(日)</p>
<p>委員会</p>	<p>メール審議 10月17日(土)</p>

発表要旨、参加方法等の詳細は、学会公式サイト・大会特設ページからご確認ください。

大会企画 シンポジウム 「これからの古典教育を考える」

趣意説明	奈良教育大学〔教〕	有馬 義貴
基調報告 1	奈良女子大学附属中等教育学校〔教〕	井浪 真吾
基調報告 2	宮崎大学〔教〕	中村 佳文
基調報告 3	和洋女子大学〔教〕	吉井美弥子
討議	〈司会〉奈良教育大学〔教〕	有馬 義貴

〔趣意〕

中古文学会においては、2019年度秋季大会から4大会にわたり、「古典の教育・普及」に関連するテーマでシンポジウムを継続的に実施している(注1)。前回2020年度春季大会のシンポジウム「文学研究と国語教育の未来を拓く」の趣意書は、次のように結ばれていた。

最後に、古典教育の将来は見通しづらくなっている。しかし、だからこそ生き残りをかけて、古典の魅力を学生たちに伝えていかななくてはならない。そこで、具体的な教材をめぐって、古典の魅力をどう伝えるか、いかに古典を普及していくかを考えていきたい。(中略)新学習指導要領下、この双方(注:定番教材と新規採用教材)の教材が有する可能性を具体的に取り押さえ、魅力ある古典教育像を示せたらと思う。そこに文学研究と国語教育との接続のありようを探ればとも考えている。

2020年度秋季大会(10月17日・18日)では、この問題意識を継承しつつ、今後の古典教育のあり方について、さらに検討していきたい。たとえば、これからの教育において古典をいかに享受し、継承・発展させていくか、そのことを考えた先に「古典教育の将来」が見えてくるのではないか。本シンポジウムでは、そのような方向性を意識しつつ、以下のような観点から従来の古典教育を相対化し、「これからの古典教育」について考えてみたい。

- ① 古典の価値や魅力に触れる、あるいはそれらについて考える機会をどう用意するか
- ② 現代にいたるまでの享受や継承・発展のあり方についてどう考えるか
- ③ 教科書、啓蒙書、絵画、注釈書、現代語訳、映像作品などのメディアをどう生かすか
- ④ 多様化、情報化、広域(グローバル)化が進む環境・時代に身を置く学習者にどう働きかけるか
- ⑤ 上記のことなどを踏まえて教材(学習材)や授業をどう構築するか

パネリストにそれぞれの方面で活躍している方々を迎え、またフロアとの意見交換をも加えて、活発な議論が展開されることを期待したい。

なお、2020年4月現在、世界的なCOVID-19感染拡大が、教育現場にも大きな混乱をもたらしている。本シンポジウム開催時には過去形にできることを祈るばかりだが(注2)、教育の意義とは何かを考えずにはいられない現況において、古典教育もそのあり方をあらためて問い直されているものといえよう。

注1 2019年度秋季大会シンポジウムは台風19号の影響により中止となったが、発表予定の内容をもとにした論文が、趣意文・総括とともに「中古文学」第105号(2020年5月)に掲載されている。また、2020年度春季大会もCOVID-19感染拡大の影響により中止となったが、シンポジウムについては、特別企画として5月24日にオンラインで開催された。

注2 4月以降、本趣意文をもとに通常開催に向けて準備を進めてきたが、その後の感染拡大状況から、7月初旬に公表された通り、秋季大会はオンライン方式による開催形態をとることになった。

研究発表 01

『源氏物語』若紫卷異見―「及びなう思しもかけぬ筋」をめぐって―

国文学研究資料館〔教〕 岡田 貴憲

『源氏物語』濔標卷で明石姫君生誕の報を受けた光源氏は、自身の将来に関して過去になされた予言を回想する。その中で源氏は、かつて自らの帝王相を指摘した相人達の予言について、須磨流謫へ至る「世のわづらはしさにみな思し消ち」てきたことを独白する一方、ここに初めて語られる三人の子をめぐる宿曜の予言が、冷泉帝の即位と将来の皇妃たる姫君の誕生をもって順調に成就へ向かっていることを思い、それを自身の「宿世」に代わる喜びとして見出だすに至る。

右の記述を信頼するならば、源氏は少なくとも冷泉帝の即位以前、表向きには朱雀帝への恭順を示しながら、その実、「宿世」たる帝位への野心を密かに抱き、須磨流謫の間もその意思を失ってはいなかったことになる。しかし、桐壺卷における臣籍降下の判断が、帝位に即くことで「乱れ憂ふること」が起るとする予言への懸念からなされていた以上、源氏が当初から帝王相を頼んで皇籍復帰の野心を抱いていたと考えることは不合理で、源氏の心境にいつ変化が起きたのかが問題となる。

本発表では問題解決の糸口として、若紫卷における藤壺密通に関わる夢解きの場面に着目し、従来は源氏が天子の父になることの示唆とされている一節「及びなう思しもかけぬ筋」への異見を通して、源氏の皇籍復帰をめぐる筋立てについての試解を提出する。

研究発表 02

教科書の中の「藤原道長」

―「望月」の表象と〈戦前〉の歴史教育、国語教育をめぐって―

鹿島文庫〔研〕 坪 美奈子

近時、自讃歌「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」をめぐり、為政者・藤原道長の協調性と融和的側面が強調されるようになってきている。「専横」から「栄華」へと、道長政治に対する評価の潮目が一変したのも、実は戦争直前の時期（第五期国定教科書）であったことに鑑み、注視すべき現象だ。教科書の「道長」像については、自讃歌エピソードのみならず、高校古典の定番教材たる『大鏡』の「肝試し」や「競べ弓」など、「敗者」中関白家の歴史と関わる話も併せて検討する。

またこの道長詠については、「杯中の月影」（水に映る月影）の寓意を見定める必要がある。詠み込まれた「欠けざる満月」は、第一義的には水面に映る〈無朽〉の山吹の花のごとく（源順詠）、祝杯の酒に浮かぶリフレクションとして、決して欠けることのない満月を指し、よって「わが世」の永久不変なることを予祝する詠者の意図を汲み取らなければならない。「望月」の表象をめぐっては、同時代に『枕草子』の「海月の骨」の逸話があり、史料及び国語の教科書教材間の有意な繋がりも指摘し得るところ、自讃歌の解釈とともに、教科書の中の「藤原道長」像をめぐり、いかなる目的でどのように教えられているのか、今後の教育改革の行く末を視野に入れつつ、学校教育全体にわたって俯瞰し把握すべき事柄が存する。教育問題と古典文学研究の、〈今この時代〉における関わり方について焦点化する。

研究発表 03

清水浜臣書入れ本『枕草子春曙抄』 「山は」段の考察

—加藤磐斎『清少納言枕草紙抄』との関係を起点として—

東北大学〔院〕 渡邊 美希

『枕草子』の注釈は、近世前期に刊行された加藤磐斎『清少納言枕草紙抄』(『磐斎抄』)、北村季吟『枕草子春曙抄』、岡西惟中『枕草子旁注』に始まる。その後近代に入るまで新たな注釈書は刊行されなかったが、近世後期には『春曙抄』への書入れの形で様々に注が付されていた。なかでも清水浜臣(一七七六—一八二四)による書入れ本『春曙抄』は転写本が多く遺され、前田夏蔭や藤井高尚の『枕草子』注釈などにも影響を与えるなど、近世後期『枕草子』注釈史において注目すべき資料である。

浜臣の書入れのうち最も多く注が付されているのは「山は」段であるが、このことは『春曙抄』「発端」に書き入れられた地名類聚章段についての浜臣注と深く関わっていると考えられる。上野理氏は、地名類聚章段の地名が名称の面白さにもとづいて選ばれていることを初めて指摘したのとして「発端」の浜臣注を評価した。上野氏の見解は浜臣注から近代『枕草子』諸注への流れを考える上で示唆的であるが、本発表では「発端」の注と「山は」段の注を一つのまとまりとして捉え、近世における先行諸注との関係を考えることで浜臣注の特色を明らかにしたい。

なかでも、浜臣の地名類聚章段の理解が『磐斎抄』を踏まえたものであることを指摘した上で、「山は」段の浜臣注が先行諸注を継承しつつ、『枕草子』諸本や多様な歌書を参照することで『春曙抄』の注を訂正増補していったことを明らかにする。

研究発表 04

『在明の別』の人物と構造 —作中和歌の検討から—

九州大学〔教〕 辛島 正雄

『在明の別』の作中和歌は 89 首を数えるが、その詠者を巻ごとに整理すると、著しい傾向性を見出すことができる。この物語が、巻一が男装の麗人たる右大将を、巻二・巻三が右大将の子である左大臣を中心に展開していることは、誰の目にも明らかである。そして、右大将の歌が予想どおり巻一に集中するのに対して、左大臣の歌は巻二のみに集中する。ここに、巻三の位置づけについての疑問が生ずる。

男装解除後の右大将は、帝寵を独占し、二人の皇子を生んで国母となると、巻二以降は女院として、甥である左大臣を陰で支える立場となる。表舞台からは退き、詠歌数も激減するものの、それによって存在が軽くなるわけではない。物語の最後を飾る和歌が女院と東宮母子のかわす贈答であることが、何よりの証拠である。

ところで、この贈答歌が『伊勢物語』第 84 段での贈答を踏まえていることは、大槻脩著『在明の別の研究』本文編に指摘されるとおりなのだが、詠者の認定に問題がある。まずはそのことを指摘・検討するとともに、この贈答歌の理解には、作中の別の贈答歌との響き合いを確かめることが重要であることを指摘する。それに気づくことは、物語全体をとおして、右大将→女院がいかなる存在として登場せしめられているかを理解することにも繋がる。前生が天人であるかれは、家の繁栄のために超人的な貢献をした。その活躍の陰で、何を求めて現世を生きたのかを問うてみたい。

研究発表 05

『源氏物語』 匂宮の薫物と〈園芸残渣〉について ―香りを創る人としての再考―

佐賀大学〔研〕 田中 圭子

『源氏物語』匂宮巻(以下、匂宮巻)では、今上帝の三の宮(以下、匂宮)の性格や行動が「昔の源氏」に比して珍妙であること等が、薫物と前栽の花への態度を順に示しながら物語られる。薫物の秘方の蒐集・調合への熱中ぶりを説いた後に、枯れ果てた前栽への偏愛ぶりを物語るくだりである。従来の研究では、こうした記述が光源氏や薫への劣性ぶりを提示する意図で行われたと解釈される。一方で、話題の組み合わせや展開の意図については、あまり詳しく議論されて来なかった。

古来の秘伝書によれば、薫物には沈香や麝香、白檀といった高価な唐物が主原料として用いられた。時代ごとの交易の都合や嗜好・流行の変化によって、主原料には多少の入れ替わりがある。室町時代には、従来の主原料とは異なる薬種を薫物の材料として処方する動きが盛んになったと考えられる。平安時代の薫物の処方やそれに関する言説を類纂したと伝わる秘伝書等の記述によると、例えば、薫物の名称が草花に由来する場合、「梅花」には梅の実の核、「菊花」には冬枯れの菊の花という、いわゆる〈園芸残渣(ざんさ)〉を処方することもあったようである。

発表では、匂宮の薫物への熱中ぶりから枯れた前栽への偏愛ぶりへと続く一連の記述が、この男主人公による新たな芳香の追及・創造作業を記したものである可能性を提起する。その上で、匂宮巻で作者が匂宮をどのように物語ろうとしたのかを、再考したい考えである。

研究発表 06

『土左日記』における日次記の効用 ―漢文日記との比較から―

北海道大学〔院〕 大場 健太

本発表では、海路の旅の記録であるという点が『土左日記』と共通している『入唐求法巡礼行記』および、自筆本が現存している『御堂関白記』と『土左日記』を比較し、『土左日記』の記録率および記録法の特徴を探る。比較の結果、①『土左日記』は、漢文日記と同様に日次記という書記形態をとり、漢文日記の日付表記を視覚的に模倣しているものの、五十五日間連続して一日も欠かさず記事が残されているすなわち記録率が一〇〇パーセントである点、②漢文日記では、『入唐求法巡礼行記』中の停泊記事のように、同一の出来事を後日の記事に纏める事例が見られるのに対し、『土左日記』では同一箇所でも停泊が続いている際も、一日一日記事が書かれている点、という二点が特異であることが明らかになった。

本作品は、記事が一日一日その日に記されたものであることを装っており、旅の時間を現在進行中のものとして表現している。一日も欠かさない日次記によって時間の経過が省略されずに示されることで、度重なる悪天候により停泊が続き、一行に停滞感が生じている状況をより真に迫るものとしている。このように、漢文日記の書式をもどきながら、その形態を利用して旅中の感懐を克明に記す点に本作品の文学性を認めることができるのであり、漢文日記との差異という観点から本作品を読み直す作業が求められる。

研究発表 07

狭衣物語・深川本系本文享受の一様相

—為明本における「九重の」歌およびその周辺本文を例として—

大阪大学〔院〕 小林 理正

本発表では、狭衣物語・巻一にみえる天稚御子降下条の「九重の雲の上までのぼりなば…」(以下、「九重の」歌)という和歌およびその周辺本文を取りあげる。当該歌は深川本系本文の歌で諸本において出入りがある。またその周辺本文は「九重の」歌とともに諸本に取り込まれる場合のあることが知られている。

今回、取りあげる為明本は、基本本文を流布本系本文とする古写本である。当該本は「九重の」歌とこれに附随する本文を有しているが、これは深川本系本文を取り込んでいるためである。深川本系本文である「九重の」歌およびその周辺の本文が深川本以外にもみえる要因については、これまで校合や書き込み、誤字の本文文化などが挙げられてきた。この推定に無理があるというつもりはない。しかし、考えてもみると、他本における深川本系本文の「九重の」歌およびその周辺本文を検討すると、当該本の書写期における深川本系本文享受の一様相が浮き彫りになるのではないか。少なくとも検討する伝本の作者が、どのように深川本系本文を解釈していたのか、また深川本系本文を基本本文に取り込むさい、如何なる要因のもと、深川本系本文とは異なる形にしていたのか、以上二点については明らかにすることができるだろう。

本発表は、為明本における「九重の」歌およびその周辺本文を例として検討することで、深川本系本文享受の一様相を、狭衣物語の本文から浮かびあがらせる試みである。

研究発表 08

『うつほ物語』の琴の名称と漢籍との関係について

國學院大學〔院〕 本間 悠子

本発表では、『うつほ物語』に登場する琴の名前について取り上げる。そして、俊蔭が得た琴には、「なん風」「はし風」「りうかく風」……というように、何故それぞれ「風」と付く命名がなされたのかについて、漢籍との関わりから考察する。

「風」と「琴」の関連といえば、斎宮女御徽子の歌が代表的であるが、この「(松)風」と「琴」の取り合わせは李嶠の漢詩を受容したものだとされている。また、『懐風藻』や『源氏物語』松風巻での「風」と「琴」にまつわる描写が、漢籍を踏まえた表現であることが先行研究で指摘されていることから、「風」と「琴」の結びつきを調べるためには、漢籍からの影響も考慮する必要があると考えるのである。

たとえば、『白氏文集』には琴の音を風に喩えたものだけでなく、「清暢堪銷疾 恬和好養蒙」(二九一頁。新釈漢文大系『白氏文集』⑨)と、清らかでのびやかな琴の音色は病を消すに足ると詠んでいるものがある。これは、『うつほ物語』蔵開・上巻でいぬ宮の誕生を祝う際の俊蔭の娘の弾琴が、「病ある者思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けばみな忘れて、面白く頼もしく、齡栄ゆる心地す。」(三四一～三四二頁。新編日本古典文学全集『うつほ物語』②)と語られていることと重ならないか。

これらの用例から、琴の名前に「風」と付く必然性について、漢籍との関わりという観点から論証してみたい。

研究発表 09

「餞」歌考

皇學館大学〔教〕 吉井 祥

本発表では、人との別れの場面で詠われた歌について、「はなむけ」「せん(餞)」という語が詞書に入った歌を「餞歌」と呼び、平安時代の実社会における餞歌の実態と機能、そして史的展開を明らかにする。

別れに関する歌は、離別、餞別、別等、勅撰集に部立が設けられていながら、今日に至るまでほとんど研究されていない。漢詩において、送別詩、留別詩は主要なテーマであり、餞別の宴で詠まれるそれらは、贈答の一種でもあるが、和歌における贈答歌の研究は専ら恋歌に偏ってきた。餞歌は、男性官人同士の詠歌が多いため、同性同士の詠み合いという点でも注目され、宴での詠歌を追究できる点でも、社交歌の研究対象として意義がある。

まず、平安の餞歌が、宴で詠まれた歌と物に付けて贈る歌に分けられることを指摘する。特に前者は、宴の場で人々が歌を詠み合ったこと、専門歌人が活躍したこと、歌には発想の型があり、地名を詠み込む機知的な表現が特徴として挙げられることが注目される。また、歌の詠み合いの点から見た際には、旅立つ者よりも見送る側の方が悲しみは勝ると訴える点が特徴的である。以上から、餞歌は、餞別の宴の集団の中で、貴族社会の紐帯を示すものとして機能していたと考えられる。更に史的展開に着目すると、惜別の情を詠うものを主流に展開し、詠歌の場においても、公的な場から、より私的な場での詠歌に移ることが明らかになる。